

雲ノ平ではいまごろ、一面に広がる雪原の冷気のなかを縫うようにして、どこからともなく春の暖かな風が漂ってきていることだろう。もうすぐ夏山シーズン。めぐる歳月のはやさを感じながら、僕たちも気ぜわしく小屋開けの準備に取りかかっている。みなさんはどんな計画を立てているだろうか。今回はこれから先、アウトドアスポーツや自然を楽しむために、多くの人とともに考えていきたいことについて話そうと思う。端的に言えば、日本では自然環境を楽しんだり利用する力は大きいのに対して、それを維持し、末長く守っていくという力があまりにも不足している状況がある。それをより創造性のある方向へと舵を切るう、という話である。少し社会的な内容になるが、とても身近なことだ。また僕の経験上、話の内容が雲ノ平山荘を取り巻く中部山岳国立公園（北アルプス）を基準にしていることを付け加えておきたい。

登山道と小屋

まずは全体の起点となる話題として、登山道について触れてみようと思う。

あまり体系的に語られることはなかったが、20世紀初頭に端を発する日本の近代登山の黎明期に、原野だった山々をだれしもが登山のできる環境へと切り拓いたのは

満足に登山道を維持できなくなる可能性は高くなってしまふのだ。無論僕個人として登山道の整備を投げ出したということではない。他人には任せられないという自負や愛着もあるし、自然に縁遠い業者が手がけることも多い公共事業は信頼性に欠けるのも事実だ。雲ノ平山荘としては10年前から東京農業大学と共同で荒廃地の緑化の研究を始めており、だれしもが実践できるケーススタディとして展開していきたいと思っている。だがこの問題はただの仕組みの危うさでは片づけられない様相も呈しはじめている。近年の小屋の経営環境の変化である。設備費、資材運搬費などの著しい高騰、装備の発達で小屋泊が減りテント泊に移行している現状、スタッフの人材不足（ブームでも山小屋で働きたいと思う人は減少している。ある意味で、変わらない山小屋と多様化し変わっていく登山者の利害が乖離してきている）など、山小屋経営を取り巻く状況は不透明感を増しつつある。経済のパラノスの先行き次第では、力の弱い山小屋は現存の建物が老朽化して建て替えようとしたとき、建設工事が事実上採算の取れない事業になってしまふ可能性すらあるのだ。万が一山小屋がなくなれば、登山道はいったいだれが面倒を見るのだろうか。これは極論だが、いずれにしても登山を文化として盛り上

各地の山小屋創業者や猟師、山案内人などの個人、あるいは信仰登山の延長線上の活動によるところが主たるものだった。それらの活動が発展して国立公園の地図になったといっても過言ではなく、当初から行政の関与は限定的なものだった。その構図は現在もほとんど変わらずに引き続いており、日常的な登山道整備をはじめとする国立公園の公共的機能の多くを山小屋が担っている。しかし、ほぼ1世紀にわたって利用されてきた登山道の状態は、近年のゲリラ豪雨などの異常気象も影響して悪化の一途をたどっている地域が数多くあり、山小屋だけで受け持つのは限界を迎えつつある。それはいわば山小屋という個人の能力や感賞、経済力に依存した状況であり、国立公園という本来公共性の強い資源を、地域差がなく安定した形で存続させるためにはあまりにも脆弱な仕組みであるといわざるをえない。例えば、従業員が3人しかいない山小屋と、30人いる山小屋が同等の広大なエリアの登山道を整備している、という事実からもその仕組みの危うさは容易に理解することができるだろう。登山道の状態は登山者数に加え、地質や気象条件など、複合的な要因が強く作用して明暗を分けるため、奥地の小さな山小屋の周辺だからといって安定しているわけではない。当然経済基盤の弱い山小屋は

げるためには、社会の共有財産として改めて「国立公園」のあり方を考える時期がきていると思う。

日本の国立公園

この状況の背景には、日本の自然環境をめぐる社会の姿勢や、国立公園の成立に至るまでの経緯が深く関係している。日本ではヨーロッパで隆盛したアルピニズムに触発されて、アクティビティとしての登山は大众的な広がりを見せた一方、西洋社会でアルピニズムと前後して高まった自然保護思想は根づかず、現代社会における自然の持つ重要性を広く共有する活動は行なわれてこなかった。結果として、現在に至るまで日本では自然環境全般に関する世論は極めて弱い（国立公園に限らず、人間社会と自然の調和や関わり方についての議論自体が希薄だ。自然保護の思想は人間社会の豊かさの大きな指標でもある。人間を大事にしない社会で、まず自然から守ろうという順番にはなりづらい）。また、世論を形成する基礎となる自然科学系の学術研究への投資も乏しく、自然保護の象徴ともいえる国立公園にかけられる国の予算もあまりにも少ない、という状況が続いている。国立公園の成立の背景からして、昨今の世界遺産誘致活動にも似た観光地開発の思惑が強かったことも事実だ。行政の積極的な関与が少なかつたために独

山と僕たちをめぐる話

山旅を愛する私たちにとって、山を取り巻く自然は永続的に続いてほしいと思う想いはみんな持っているはず。しかし、その自然環境はだれが守っているのか。私たちはただ楽しむだけに終わっていいのか。これから先の未来のために、日本の山の現状を見つめてみよう。

文●伊藤二朗 Text by Jiro Ito
イラスト●神田めぐみ Illustration by Megumi Kanda

自の山小屋文化が発生したという側面もあるが、さまざまな事柄が臨界点を迎えていることは前述のとおりである。

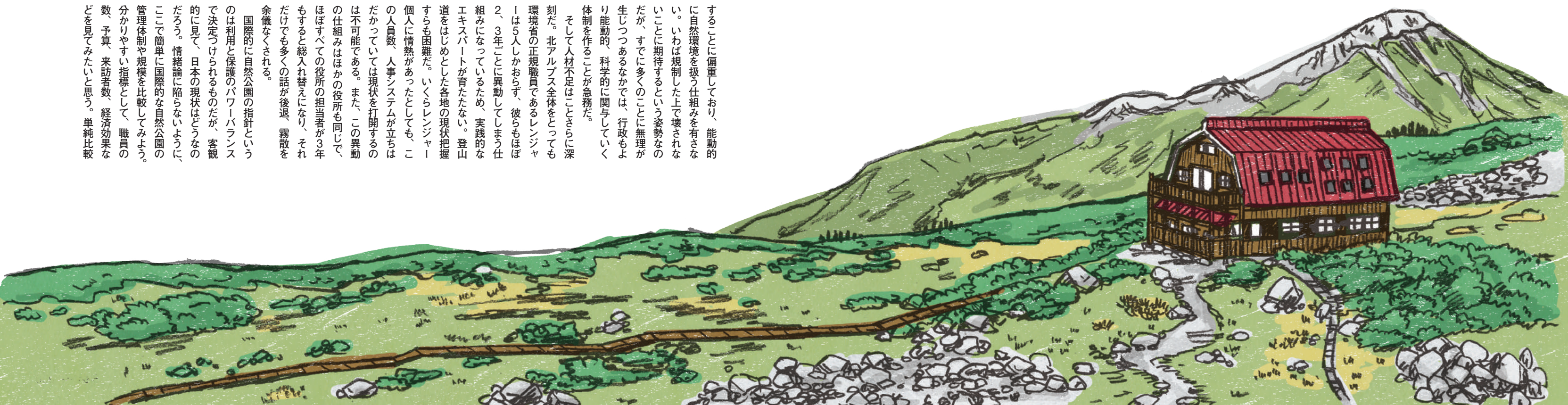
端的な理解を促すために国立公園の特徴的な事柄を以下にまとめてみよう。

日本の国立公園の指定は「地域制」という方法に基づいている。これは歴史的に多様な土地の権利者が混在していることから、土地の所有は一元化せずに、自然公園にふさわしいと評価された一帯を公園に指定する方法だ。同じ方法をとるイギリスなどは、むしろ民衆の間から自然、文化保全の機運が高まったため、地域社会と行政、NPOなどがコンセプトを共有し、役割分担をすることで理想的な形を作っている。しかし日本の国立公園では残念ながら、利害の噛み合わない縦割り行政の弊害が目立つ。地主は林野庁、自然保護は環境省、河川は国土交通省、ダム周辺は電力会社、公共事業の受け皿は地方自治体など、それぞれが異なる法律や目的を持って混在しており、意見を集約する仕組みもない。そのなかで環境省が最も規模が小さい組織なのである。国立公園に指定された後にさまざまな大規模開発にさらされたものこの構図が大きく影響している。また、自然公園法の体系も、近年少しずつ改善傾向はあるが、（受動的な）規制によって風景を維持

することに偏重しており、能動的に自然環境を扱う仕組みを有さない。いわば規制した上で壊されないうことに期待するという姿勢なのだ、すでに多くのことに無理が生じつつあるなかでは、行政もより能動的、科学的に関与していく体制を作ることが急務だ。

そして人材不足はことさらに深刻だ。北アルプス全体をとっても環境省の正規職員であるレンジャーは5人しかおらず、彼らもほぼ2、3年ごとに異動してしまう仕組みになっているため、実践的なエキスパートが育たない。登山道をはじめとした各地の現状把握すらも困難だ。いくらレンジャー個人に情熱があったとしても、この人員数、人事システムが立ちほだかっているのは現状を打開するのは不可能である。また、この異動の仕組みはほかの役所も同じで、ほぼすべての役所の担当者が3年もすると総入れ替えになり、それだけでも多くの話が後退、霧散を余儀なくされる。

国際的に自然公園の指針というのは利用と保護のパワーバランスで決定つけられるものだが、客観的に見て、日本の現状はどうなのだろう。情緒論に陥らないように、ここで簡単に国際的な自然公園の管理体制や規模を比較してみよう。分かりやすい指標として、職員の数、予算、来訪者数、経済効果などを見てみたいと思う。単純比較





は難しく、あくまでも概要であることは「容赦願いたい」(下の表参照)。

やはり驚くのは、北アルプスに915万人も訪れているのに、正規職員が5人しかいないことだ。日本の自然環境は、イギリスの単調なそれよりもはるかに複雑で手が掛かるし、探求しがたいもあると思うのだが……。バランスを見る上で経済効果を認識することも不可欠だろう。国内でも地域社会との連携を強化させつつある事例なども出てきてはいるようだが、大局的には保護のベクトルは人混みに掻き消されそうである。

登山ブームと情報

最後に、登山を取り巻く情報のあり方について触れたいと思う。現在は第3次登山ブームと呼ばれる。ブームというのはどこかその終焉も内在してしまっているように思われるので、僕はなかなか寂しい響きを感じる。これまでも日本の登山は第1次登山ブームから現在に至るまで、さまざまなブームで彩られてきた。アルピニズムに始まり、山の歌、百名山、ワングル、中高山、トレランなど、どれも良いとか悪いではなく、そのたびに登山者層が大きく変わり、多くの場合、時代ごとの登山のスタンスの違いから新しい時代を懐疑的に見る人たちが現れたり、現場にささやかな混乱が生じたりす

る。しかし考えても見ればどのブームも20年とは続かず、新しい世代に苦言を呈する人たちにしても、その時代なりの問題が山積していったはずだ。また、どのブームでも決して「自然」そのものは主役にはならず、キャッチコピーや登山スタイルに重点が置かれてきた。ブームでなくとも、つねに性善説的な表現に縛られた、観光的なアプローチが強かった。僕が本当にもつたないと思うのは、その連続性のなさで根っこはなさだ。上述したように、すべての人が喜びの源としているはずの自然を扱うシステムには多くの問題があつて、それを変えられるのは唯一世論ではない。しかしブームを意識すると、どうしても入門者におもねる傾向が強くなり、情報発信のあり方が短期的なインパクトを重視してしまつたため、表層的な紹介の範疇を脱却できなくなる。そのスパイラルだと、どうしても国立公園制度の問題とか、登山を取り巻く経済の話、自然環境の本質的な魅力を共有するところまで到達しない(またサービス業としての山小屋情報に偏りすぎると、いたずらに山小屋の格差を助長しかねないし、山小屋側の意識もおかしくなる……)。これらすべてが構造的なまま終わらせる原因となつてしまつていると思う。身近な話としても、現実が後手に回つてい

る。しかし考えても見ればどのブームも20年とは続かず、新しい世代に苦言を呈する人たちにしても、その時代なりの問題が山積していったはずだ。また、どのブームでも決して「自然」そのものは主役にはならず、キャッチコピーや登山スタイルに重点が置かれてきた。ブームでなくとも、つねに性善説的な表現に縛られた、観光的なアプローチが強かった。僕が本当にもつたないと思うのは、その連続性のなさで根っこはなさだ。上述したように、すべての人が喜びの源としているはずの自然を扱うシステムには多くの問題があつて、それを変えられるのは唯一世論ではない。しかしブームを意識すると、どうしても入門者におもねる傾向が強くなり、情報発信のあり方が短期的なインパクトを重視してしまつたため、表層的な紹介の範疇を脱却できなくなる。そのスパイラルだと、どうしても国立公園制度の問題とか、登山を取り巻く経済の話、自然環境の本質的な魅力を共有するところまで到達しない(またサービス業としての山小屋情報に偏りすぎると、いたずらに山小屋の格差を助長しかねないし、山小屋側の意識もおかしくなる……)。これらすべてが構造的なまま終わらせる原因となつてしまつていると思う。身近な話としても、現実が後手に回つてい

る。しかし考えても見ればどのブームも20年とは続かず、新しい世代に苦言を呈する人たちにしても、その時代なりの問題が山積していったはずだ。また、どのブームでも決して「自然」そのものは主役にはならず、キャッチコピーや登山スタイルに重点が置かれてきた。ブームでなくとも、つねに性善説的な表現に縛られた、観光的なアプローチが強かった。僕が本当にもつたないと思うのは、その連続性のなさで根っこはなさだ。上述したように、すべての人が喜びの源としているはずの自然を扱うシステムには多くの問題があつて、それを変えられるのは唯一世論ではない。しかしブームを意識すると、どうしても入門者におもねる傾向が強くなり、情報発信のあり方が短期的なインパクトを重視してしまつたため、表層的な紹介の範疇を脱却できなくなる。そのスパイラルだと、どうしても国立公園制度の問題とか、登山を取り巻く経済の話、自然環境の本質的な魅力を共有するところまで到達しない(またサービス業としての山小屋情報に偏りすぎると、いたずらに山小屋の格差を助長しかねないし、山小屋側の意識もおかしくなる……)。これらすべてが構造的なまま終わらせる原因となつてしまつていると思う。身近な話としても、現実が後手に回つてい

国際比較—国立公園の管理体制、規模など

	予算(年間)	正規職員数	面積	来訪者数(年間)	経済効果(年間)	全国の国立公園予算(年間)	全国の職員数	全国の国立公園数
アメリカ(※1) イエローストーン国立公園(NPS)	90億円	330人	8,991km ²	400万人	380億円	2,600億円	20,000人	59
日本 中部山岳国立公園(環境省)	非公表	5人	1,743km ²	915万人	統計無し	83億円(※2)	300人	34
イングランド(※3) ピークディストリクト国立公園(NPA)	20億円	280人	1,438km ²	870万人	770億円	110億円	1,100人	10

※1)アメリカは営造物公園といって土地の所有を含む一元的な管理体制のため警察権や社会資本整備など包括する業務が巨大である。社会背景の違いにより単純比較はできないが、それぞれの社会が国立公園に直接的に投じる力という見方をすると見えてくることはある。※2)自然公園の整備費。※3)イギリス全土ではなくイングランド内の国立公園

〈出典〉平成27年度環境省予算案事項別表、National Park Service(2015年)、Valuing England's National Parks(2011年)

る。しかし考えても見ればどのブームも20年とは続かず、新しい世代に苦言を呈する人たちにしても、その時代なりの問題が山積していったはずだ。また、どのブームでも決して「自然」そのものは主役にはならず、キャッチコピーや登山スタイルに重点が置かれてきた。ブームでなくとも、つねに性善説的な表現に縛られた、観光的なアプローチが強かった。僕が本当にもつたないと思うのは、その連続性のなさで根っこはなさだ。上述したように、すべての人が喜びの源としているはずの自然を扱うシステムには多くの問題があつて、それを変えられるのは唯一世論ではない。しかしブームを意識すると、どうしても入門者におもねる傾向が強くなり、情報発信のあり方が短期的なインパクトを重視してしまつたため、表層的な紹介の範疇を脱却できなくなる。そのスパイラルだと、どうしても国立公園制度の問題とか、登山を取り巻く経済の話、自然環境の本質的な魅力を共有するところまで到達しない(またサービス業としての山小屋情報に偏りすぎると、いたずらに山小屋の格差を助長しかねないし、山小屋側の意識もおかしくなる……)。これらすべてが構造的なまま終わらせる原因となつてしまつていると思う。身近な話としても、現実が後手に回つてい

る。しかし考えても見ればどのブームも20年とは続かず、新しい世代に苦言を呈する人たちにしても、その時代なりの問題が山積していったはずだ。また、どのブームでも決して「自然」そのものは主役にはならず、キャッチコピーや登山スタイルに重点が置かれてきた。ブームでなくとも、つねに性善説的な表現に縛られた、観光的なアプローチが強かった。僕が本当にもつたないと思うのは、その連続性のなさで根っこはなさだ。上述したように、すべての人が喜びの源としているはずの自然を扱うシステムには多くの問題があつて、それを変えられるのは唯一世論ではない。しかしブームを意識すると、どうしても入門者におもねる傾向が強くなり、情報発信のあり方が短期的なインパクトを重視してしまつたため、表層的な紹介の範疇を脱却できなくなる。そのスパイラルだと、どうしても国立公園制度の問題とか、登山を取り巻く経済の話、自然環境の本質的な魅力を共有するところまで到達しない(またサービス業としての山小屋情報に偏りすぎると、いたずらに山小屋の格差を助長しかねないし、山小屋側の意識もおかしくなる……)。これらすべてが構造的なまま終わらせる原因となつてしまつていると思う。身近な話としても、現実が後手に回つてい

る。しかし考えても見ればどのブームも20年とは続かず、新しい世代に苦言を呈する人たちにしても、その時代なりの問題が山積していったはずだ。また、どのブームでも決して「自然」そのものは主役にはならず、キャッチコピーや登山スタイルに重点が置かれてきた。ブームでなくとも、つねに性善説的な表現に縛られた、観光的なアプローチが強かった。僕が本当にもつたないと思うのは、その連続性のなさで根っこはなさだ。上述したように、すべての人が喜びの源としているはずの自然を扱うシステムには多くの問題があつて、それを変えられるのは唯一世論ではない。しかしブームを意識すると、どうしても入門者におもねる傾向が強くなり、情報発信のあり方が短期的なインパクトを重視してしまつたため、表層的な紹介の範疇を脱却できなくなる。そのスパイラルだと、どうしても国立公園制度の問題とか、登山を取り巻く経済の話、自然環境の本質的な魅力を共有するところまで到達しない(またサービス業としての山小屋情報に偏りすぎると、いたずらに山小屋の格差を助長しかねないし、山小屋側の意識もおかしくなる……)。これらすべてが構造的なまま終わらせる原因となつてしまつていると思う。身近な話としても、現実が後手に回つてい



伊藤 二郎

雲ノ平山荘経営者。1981年、東京生まれ。幼少より黒部源流で夏を過ごす。2002年に父・正一が経営する雲ノ平山荘の支配人になる。2010年、日本の在来工法をもちいた新しい雲ノ平山荘の建設を主導